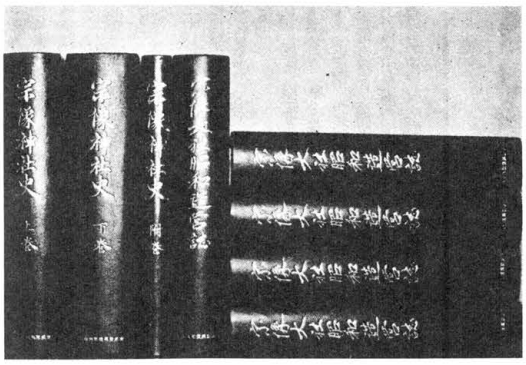
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代②1311
年定価一送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園二―三一（〒八一三）
電話福岡(ハ三)六五一―九四五六番
京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都(〇三五)三四一―三四四（代）六六〇番

宗像大社昭和造営誌刊行す

―昭和の歩みを記録―



かねてより編さん中の「宗像大社昭和造営誌」が、この程上梓公刊の運びとなった。

周知のとおり、当社では去る昭和四十四年より二ケ年の間に辺津宮本殿の修復工事を中心に、祈願殿、勅使館、斎館等の新築、既設建造物の修改築、境域内外の拡張整備、植栽造園等により荘厳なる神域を再現し、昭和四十六年十一月には畏くも勅使の御参向を仰ぎ盛大な遷宮大祭が斎行され、更にそれに続いて第二宮・第三宮の復興工事、高宮参道橋工事、並び沖津宮社務所、中津宮参籠殿の新築等が執り行われ、昭和五十年八月にはすべての工事を終え、ここに多年の念願であった大造営事業は滞りなく完了することが出来た。その壮大な規模と多額の募財、完成までの異例の速さ等は神社造営の中でも稀有の偉業であり、また当社史の上でも昭和大造営として燦然と輝く金字塔であるといっても過言ではなかろう。

この大造営事業の全容を明らかにして一般に公開し、神徳宣揚と協賛者各位への奉謝を目し、更には末永く後世に記録として伝えるため先に「宗像大社昭和造営誌」の刊行が企図され、造営誌編纂委員会が設けられ、当社神職五名と復興期成会関係者三名が執筆に携り、また宗像神社史の編纂に当られた小島鉦作氏を顧問に迎え、編纂刊行の指導を仰いで骨々と編纂が進められた。

全章の脱稿に至るまで、編纂会議は前後合せて五十数回に及び、毎回周密な考査と熱心な討議が加えられ、出来得る限り詳細、正確な記述が期された。また本造営誌を単なる工事報告書に終らせることなく永年に亘る破邪顕誠の結晶として皿の通った記録書とすべく熱心な討議が交された。

本書に収録された内容は次のとおり。

第一章　皇室の御崇敬
第二章　昭和前期の復興運動
第三章　宗像神社復興期成会の発足とその活動
第四章　昭和前期の造営
第五章　大造営計画及び募財活動
第六章　大造営工事の概要
第七章　遷宮祭
第八章　奉祝祭諸行事
第九章　大造営事業の精算
第十章　第二宮・第三宮の造営
第十一章　沖津宮・中津宮関係工事
付録一　各種名簿
付録二　造営年表

印刷所は神社史の場合と同じく東京の株式会社精興社。

本文六百九十頁、図版五十三頁、七十枚のカラー写真のほか、百点の挿図が随所に織り込まれている。題字は復興期成会長出光佐三氏の揮毫になる。

去る二月十七日、葦津宮司は宮中に参内し、天皇陛下、皇太子殿下、各宮家に特製天金本の献上を終えた。

発行部数は千部。本書は社造営の協賛者をはじめ、全国著名神社、大学官公私立図書館、郡内小中高等学校、諸官庁、工事関係者、復興期成会関係者等に贈呈される。

当社では先年「宗像神社史」上下巻・付巻の三冊が刊行され、神社の由緒闡明に寄するところ多大であるが、更に本造営誌が加わって一層充実し、これが神徳の発揚に資する意義は大きく、また貴重な資料を後世に残し得たことに対し関係者一同の喜びも一入である。

節分祭斎行す

当天社恒例の節分祭が二月四日午前十時より祈願殿において葦津宮司以下職員奉仕のもと斎行された。祭典に引き続き当社独得の"鳴弦の儀"、年男（としおとこ）による"豆打式"が同殿正面石階上において古式ゆたかに厳粛裡に執り行なわれて、今年一年間の無病息災、延命招福を祈念し、追儺（ついな）の儀式をそえた。この日祭典には立石氏子会長をはじめ郡内氏子各位、高橋羊三海町々長並に各町村、議会代表、郡内外から多数の崇敬者、また郡内幼稚園児の参列があり盛大裏に斎行された。

節分祭は二月三日となっているが四日一度の闇年の場合は前後にずれ今年は一日遅れの四日となった。当日は近年になく天候にも恵まれ、一昨年来の不況の影響もあり、善男善女の社頭に詣づき一心に祈念する姿も多く、当社で準備した家庭での厄除の福豆も授与希望者が多く追加準備をする程であった。

又、今年も玄海幼稚園一一五名、東海大自由ケ丘幼稚園八名の園児が園長先生方に引率され祭典に参列した。男女代表四名の玉出奉弓に合せ力一パイの拍手を打つ姿は一般参列者の心を清々しくさせていた。祭典終了後宿衛舎に於いて宗像青、郡支部協会の協力により交通安全教室を行なった。

当日は県警本部より児童から「スタコラサッチャンのお姉さん」と親しまれている交通巡視員名による人形劇、腹話術等で理解やすい交通安全の話があり子供達は大喜びであった。

論説　女子大学生の祝詞

全国の私立大学の中には、仏教ギリスト教宗派神道等の宗教関係の団体によって経営されている大学が多数ある。いわゆる宗門大学は、その宗教を奉ずる家庭の子弟教育を主眼としている。当然信仰を植え付ける狙いもあろう。牧師や僧侶を志す者を対象とする職業教育も、こうした特殊大学では行われている。これは学則にもうたわれているだろうし、志願者もそれを承知で入学する以上、宗教々育に不平は言えない。

宗派神道と神社神道を職業的に志す者を対象とする大学もあって、ここでは神道者に必要な講義科目があるが、筆者が出講するR女子大学のように宗門に全く無縁の学園で、神道史や祝詞宣命（のりと・せんみょう）の研修を一般学生に課している例は、まことに珍しいことであろう。

R大学は四年制の一般大学と同様で、文学部の特殊科目として随意に神道史聴講を指示している。週に二日、一時間半、既に依嘱をうけて十年継続した。最初の数年は、四年生の国文科学生を中心に、少数の英文科学生を加えて聴講生数名という年度もあったが、現在は国文科三年生に変更、殆んど全員が出席する。

筆者は、文学部長の指示に従って、前期に神道史、後期に延喜式祝詞と続日本紀の宣命を講義している。今では限られた少数時間を考慮して、学生向きに文学専攻の女子学生としての高等常識の点から、諸大家の専門書を要約しこれに筆者の若干の見解を添加したテキストを配布している。

学長は、常に日本女性としての品格を備え教養を高めるための建学の趣旨を、学生に理解させることを念願とし、学生も他大学に比して温順でまじめである。筆者もその依嘱に応えるべく、民族精神史とも言うべき神道史や祝詞宣命の現代の若人には難解と思われる精神的文化的意義を、平易に強調したいと心がけている。

学期の始めに、特殊科目としてこれを講義する意義と、講師として宗教に関する態度とを説明する。宗教々育が目的でなく、各時代を通じて文学史に流れている神仏儒基の思想や習俗を研修して、文学作品の研究に参考資料となるよう望む。信仰の自由を、神道史の講義は損害しない。名目は神道史であっても、内容は仏教儒教その他の宗教的色彩を混入した二種の日本宗教史と見るように述べる。憲法二十条の信仰の自由を持ち出しての反発などは一度も起ったことはない。

然し、神道史は青春学徒の夢多き時代に、夢のような神話に始まり、民族制度の厳しい社会慣習の中に経過する神祇政治は、決して夢を与えずくれない。退屈な話柄は興味あるものとは、お義理にも言えない。

夢うつつで聴いた神道史も、夏休み前に江戸時代のキリスト教弾圧や復古神道の勃興で終りに近づき、休暇中の作業として神道に限らず広く宗教に関する研究調査のレポートを、九月に提出させることに定めている。郷里の神社仏閣にまつわる行事慣習など、丹念に調査したものもあり、神話教育の是非を評論したものもあり、概してまじめな意見と見る。沖縄出身の学生が郷里の島々を巡った調査など異色ものもあった。

後期の祝詞と宣命は、その古典国語が持つ上代の民族精神をたずねる点に意義がある。学問上、祝詞と言えば、延喜式の祝詞を指すので、延喜式五十巻成立の法制的探究を解題する。宣命は、六国史に数えられる続日本紀に掲載する宣命が、学問的には最も代表的な宣命書（せんみょうがき）とされているので、その解題を取って、後世の和漢混合文体の起源を詮索することを定石としている。

祝詞と宣命は、両書から各二篇を取り上げる。即ち、祈年祭の祝詞と文武天皇即位の宣命である。試験問題には延喜式解説の要点の外、古典国語の訓読と解釈を求める場合がある。やまとことばは、他の科目で方葉や源氏の講義は聴いていても、やはり難物であろう。面白い答案もあった。一例をあげると、水分（みくまり）を分水嶺とせずにH2Oの化学的説明が述べられ、延喜式を驚かす。

微笑を誘う話もある。祝詞の千木（ちぎ）の名称とその意義を知っていたため、家族揃っての初詣で、弟妹から社殿の棟について尋ねられ、高等常識の神道講義が役立って、両親を感心させた学生もあった。学問に無駄はない。

阿蒙少言

旧制高校の同窓生達が集って、白線帽に若き日の思い出を温ふる会合はほほえましい。戦闘帽に懐しさはないが、何部隊戦親会の案内状が世話好きの元隊員から年一度頂戴、大抵は温泉地で一泊の開催。もう皆しわやしらが、往年の勇士は見当らない「元大日本帝国軍人を、敗残兵に誰がしたのか。ルバング島に独り抗戦三十年の小野田寛郎さんも、敗残兵ではたまらない。もう日本はないと怒ってブラジルに逃げたと、酒が言わず不平も出る○敗残兵の懇親会では意味はない。大陸で牛缶をつついて現地酒を飲み合った連中が、口実を作っての宴会なら、さしずめ往年の不満をぶちまける悔恨会になりかねない。敗残兵同士集まらぬがよい。欠席する○「元」の肩書が出る時ロクなことはない。元を正せば、とは悪い話の場合が多い。元の肩書をにしたのは、権威ある地位に在った者たちであろうが、然し、元大臣も権力はないので、うらさびしい郷愁が浮ぼう。元大日本帝国軍人など、今日悪人扱いになりかねない○肩書をあげなければ、値っちが認めてもらえないのは、当人が肩書以下の人物だからである。病院の看板に医学博士、お粗末な書物に文学博士、いずれも売られた先生になると、博士号などつけては似つかわしくない気がする。博士以上になると、姓名を呼び捨てにした方が博士先生以上の敬意がこもる。愛称もよい○敗戦時に塗り消した官幣の二字を、再度白標に現わした官幣大社がある。元を付ければ、との意見が出るが、その必要はない。官幣は歴史的事実で許称ではない。豊臣秀吉のことを、元太閤秀吉と書いた歴史書は見あたるまい。余計な詮索は二無用。（白雲）

第一五〇回　宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

白木うめの
掌に余る椎茸を採る長雨のやうやく止みしうすら陽の中　武丸　立石ろせ乃

ピラカンサスの赤き実びっしりつく枝に鵯の群れ来る雨降る冬日も　宮田　片山　一

一瞬よいて没つる陽は眼交の山の陵線染めて日暮るる　香椎　桜井　ツ子

縫ひ上げて袷寝敷く夜の床にわくこのよろこびよ老ひたる者の　原町　八波　五月

感情の起伏も見せず一時の背信もなく夫は老行く　田久　小方　実

東京に近く温泉の宿泊料たかからむ女中の運ぶお酒十本（伊香保にて）　武丸　原田　リノ

峰の雪うす紅に染めし日が今外輪山に没してゆけり　田島　吉武　武雄

川底に動も鈍き椎魚の群れから風寒くまだ春浅し　深田　中野　節子

耕運機使う青年に声かけて行くに新しき土の香がする　河東　花田のぎく

星もなき空に今宵も定期便か赤黄の光点滅しゆく　東郷　藤崎　辰子

曲線を自在に描き流れゆく水は沼底の泥を穿ちて　田熊　鷲津かつ代

転校のさびしき幾度こうへつつ父の任地につきて行しか　津屋崎　麦野　時雄

咲き初めし庭の老梅春を呑ん朝夕ながめ心なごめり　大井　吉田　和子

窓越しに差し入る陽さし春めきて籠のカナリヤしきりに囀ずり　大井　吉田　ますみ

殉教の悲話を沈めて天草の海碧々と真珠育つ　宮田　片山　一

初産の嫁に食ますと雨の中をかつを菜を採る好物なれば　福岡　吉田　信夫

福間潟白沙青松見はるかす部屋をたまいて静寂つづく　福岡　吉田　信夫

萌えいでし草かまこう路のとう踏まずわがゆき朝の愛つむ　田熊　吉田　直志

幹とても皮ばかりなる梅のまっ老りてかよわさ人の尊ぶ　逗子　石松や寿子

錬倉の歴史を秘めて大銀杏八幡宮の庭にそびゆる　津屋崎　占部　由久

小波のかややダムに糸垂れてわかさぎを釣る寒に堪へつ　曲　天野トモエ

声あげて下校の子らの駆けゆく春雷烈し立春の雨　城南ケ丘　仰木　亀代

冬の花素枯れし庭より選び来し娘の白き手に水仙のたば　田熊　今村　重刀

禱比須さま船へりたき舟長はふなおさ今日も豊漁を祈りて沖へ　宮田　片山　朔子

しみじみと語り合いたき日々にして往きにし夫面はおぼろに　田熊　立花　勇雄

雪の阿蘇裾野は降りつ消えゆくと猶の白銀春陽に輝く　鐘崎　村田　四郎

玄海若布献上さる

初春に真心こめて採取

恒例により玄界の荒波の中で育った早春のわかめ献上が去る二月二十八日に行なわれた。

玄界灘の寒風厳しい二月初旬、宗像七浦漁業組合員により誠心をこめて採取された献上わかめは、真水で一枚一枚丁寧に洗浄された後、板上ならべ天日に干して謹製されたわかめである。この玄海わかめは皇居賢所、天皇、皇后両陛下、皇太子、同妃殿下に献上される海洋事業賛会二大行事の一つ、宮中献上わかめは今年で十四回目を迎えた。

本年度は、宇都宮祢宜、神島権祢宜、大島漁業組合長、古川俊枝氏、神湊漁業組合長田中吉助氏の四名がこの任にあたり、二月二十七日国鉄博多駅長の特別の御配慮を受けて、「あさかぜ二号」で上京した。

翌二十八日、出光興産㈱東京本社総務課で献上の準備を整え、朝もやけむる小雨の中を宮中に参内した。

先づ一行は宮内庁掌典部に於て、永積掌典長に献上御挨拶を述べ、第一応接室で木村待従に面会、宇都宮祢宜より玄海早春わかめ献上の旨を申し上げ、宗像七浦漁業者の努力を詳しく説明した。

その後、宮中掌典の案内で、畏くも賢所の参拝を許された一行は、白衣に身をつつみ清浄なる玉砂利を踏みしめ御御饌まで参進し、皇室の弥栄を祈念した。

かくして皇居での献上を無事えひきつつ東宮御所へ伺候した。

各国大使が訪問されているのであろうか、慌しい中を応接室に於て、飯野事務官に献上方を申し上げ、東宮御所を退出、ここに昭和五十一年度の玄海わかめ献上の儀は悉く終了した。

新入生対象として

〝宗像大社奨学生選考会議開催さる〟

二月十三日、昭和五十一年度宗像大社奨学金受給生の選考会が斎館で行なわれた。

この奨学金制度は、去る昭和三十四年皇太子殿下御成婚記念事業の一環として、当大社奨学資金運営委員会が設定された。

昭和三十五年四月二十九日に当大社奨学金第一回目が給付され本年で十七回目を迎える。

今年は、日の里小学校が初めて卒業生を送り出す為、新たに仲間入り、従来の学校に併せて七中学校の卒業者が対象とされる。

当日は、郡内各中学校（玄海、大島、津屋崎、福間、城山、中央、日の里）の校長にお集り願い当社からは、葦津宮司、養父祢宜、神島権祢宜が出席、葦津宮司より奨学生の選定は各中学校校長に一任するので、有為の社会人、真の日本人育成を目的とした大社奨学金制度の趣旨を充分御理解たいき、選考願いたい旨を懇請。

第一回受給日を恒例により、四月二十九日（天皇誕生日）に決定した。

尚当大社奨学金は御承知のごとく、高校在学期間中（三ケ年）支給され、これの返済の義務はない。

誌上に運営並給付規程を二、三抜粋すれば次のとおりである。

一、資金は、当神社の育英事業に協賛するため奉納された篤志家の浄財をもつてこれに充て、資金より生ずる果実を奨学金として給付する。

二、奨学金は宗像郡出身にして高等学校又はこれと同等以上の学校に在学する学生方々徒に給付する。

一、当神社より給付する奨学金は宗像神社奨学金と称し国家社会の発展に貢献する有為の人材を育成する為その勉学を援助することを目的とする。

尚、当大社春季大祭の当日、今回の献上わかめ採取に功労のあった左記の方々に大社より感謝状及び記念品が贈呈される。

◇

表彰者名（順不同・敬称略）

大島　原一人・遠藤義男
福間　広渡助兵衛・広渡勘三郎
神湊　天野与一郎・田中福夫
津屋崎　吉野寅蔵・西地喜三郎
地ノ島　深田力松・中東弥助
鐘崎　久田折好・瀬辺綱平

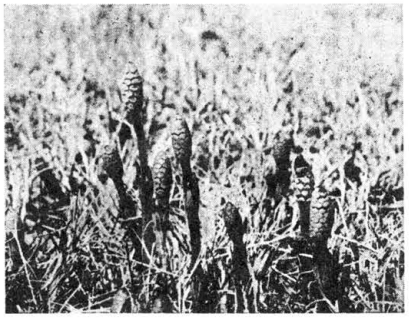
玄海町高砂会（老人クラブ）

会旗寄贈さる

三月一日、玄海町老人クラブ高砂会（会長清水定夫）の会旗入魂式が当社祈願殿に於ておこなわれた。午前十一時半、会員三十余名が参列、お祓いの後、祝詞が奏上され、玉串拝礼、感謝状の贈呈が行われた。

同会は会員八十数名を数え、老人大学を始め、各種行事に積極的に参加して好成績を収めている。このため、会員中より会旗製作を望む声が強く、会員力丸竹雄氏の子息力丸孝武氏の寄贈によって、優勝旗に勝るとも劣らぬ立派な会旗が誕生した。紫地に刺繍された会旗のもと、高砂会のオールパワーのより一層の発展が期待される。

春を楽しく！



雛まつりも終わり、春寒ともいえる冷え込みが続いたが、もうそこに春の足おとを肇に感ずる日々、境内周辺では、三々五々つれだって休日を『つくしとり』に楽しむ家族連れで賑わっている。

各地で梅の満開の報に接するが、南の方ではもう桜もちらほら咲いたと伝えきく。

沿岸では、新若布等の海藻類の収穫期に入り、出荷作業におおわらわとのことである。

そろそろ山間部でも、春の味覚の「ツワ」「フキ」「ゼンマイ」「ワラビ」も芽をふく頃となり、行楽客で賑わうことであろうが、まだまだ冬山遭難のニュースを聞く、日常生活と同様、全てのことに気を配り、春の訪れを楽しみたいものである。

【御案内】

宗像大社春季大祭を左記日程にて斎行致しますので、御案内申し上げます。

記

三月三十一日（水）
午後五時　高宮祭
午後六時　宵宮祭

四月一日（木）
午前十一時　大祭
（氏子奉幣、風俗舞、浦安舞奉納）

四月二日（金）
午前十一時　大祭
午前十一時三十分
宗像護国神社大祭
午後二時　献茶祭

四月四日（日）
午前九時　奉剣道大会
午前十時　奉納吟詠大会

四月十三日（火）
午後五時沖中両宮宵祭

四月十四日（水）
午前九時　沖津宮大祭
御獄神社大祭
十一時　中津宮大祭

ラインの河下り

老父の外国旅を楽しくしようと努める運転手のフランス青年がツアー君、ドイツの広野を春風切って快走する。地理学の緯度には関係なく、日本の弥生と同じ位の気温で、村落も牧場も若草が萌えている。バスは河沿いの道路に出た。ゆるやかに流れる河、両岸の風景は素晴らしい。数多くの歴史を秘めたライン河である。

ある船宿場から河船に乗る。バスは空車のまま陸地まで陸送する。船は勿論遊覧客用のスマートな八十トン程度の汽船で、両岸に移り変る奇峰や岩壁に残る古城など眺めながら、サロンの軽食を楽しむ風情、日本の観光地の客船と変りはない。

京都風山の川下りや九州球磨の川下りは、岸辺を専門技術で縫うように飛ぶように走る小舟だから、ラインのゆったり気分の河下りとは比較にならない。せっかちな日本人の民族気質は、せせこましい山河が造ってくれたのか。

断崖を巧みに利用した古城の跡、縄張りを争う荒々の戦闘意欲が、甲冑に身を固め槍ぶ矛とを持った騎馬武者を走らせたことであろう。ラインの渚は、幾多の流血の惨事を見てきたことであろう。

古今東西どの民族も、長い歴史の大部分を戦争で彩っている。どの民族も平和を望む思いは持っていても、その宗教戦争を交えさせた事件も少くない。欧州には十字軍の騒乱が、信仰の名によって庶民を苦しめた。中でも悲劇のサイたるものは、少年十字軍であった。これを企画し指導した者は、学生達の批判では、少年を騙してみかけの美しい毒の実を食べさせたようなもので、悪魔に相当するという。

遊覧船のことだ。水しぶきをかぶる喜笠の川下りとは、全然わけがちがう。居眠りをする学生もいる程ゆったりしたものである。

ベルリン封鎖時代の大空輸の拠点で知られ、ドイツ中で最も外国人の多い国際都市であるフランクフルトに着いたのは夕刻であった。人口八十万を越えるこの街は賑やかで、なるほど国際都市らしい特色が漂う。ここに一泊する。

フランクフルトは、外国人の集める観光地としても有名で、そのための案内施設や慰安店舗も多く目につく。ホテルに近いところフランクフルト国民酒場の看板も見えて、中華料理や日本料理の店もあって夜遅くまで繁昌するそうだが、ビヤホールは女学生達に縁はない。夜の街の散歩は自粛するよう案内役の注意もあった。

ここでの見どころは、ゲーテ記念館である。ゲーテは十八世紀の中頃この都市に生れ、大学を卒業して間もなく若くして「若きウエルテルの悲しみ」を発表し、全欧州の文学界にその名を知られるに至った。彼は詩人であると同時に哲学者、科学者でもあって、法律を修めて政治方面にもその勢力を及ぼし、彼に発したローマン主義運動は十九世紀を風靡する観があった。

半句先生の外に学生数名、案内記解説でゲーテを紹介する話に耳を傾けた。ゲーテの出たフランクフルトに来て、そのアウトラインを学ぶ事は研修旅行の看板が泣くよと、半句先生の一言も交って談笑は尽きない。

予定の通りに、一行のバスはフランクフルトを出発して、オランダに向う。快走する高速道路から古城の跡がいくつも見える。僅かの日数で七ケ国の巡歴、とても詳しく城跡など訪う暇はない。途中西ドイツの首都ボンを通過した。市街の中心地に日本大使館があって、日の丸の国旗も春風に靡いていた。

戦後三十年、敗戦国ドイツの首都に仰ぐ日章旗に、戦争を知らない学生達は幸せと思いながら、半句先生は「松岡洋右」の名をつぶやいた。ヒットラーとムッソリーニ、独伊の指導者は遥か離れた極東のわが国と三国同盟を結んで、無謀の世界相手の戦争に突入した。同盟締結の立役者として派遣されたのが松岡洋右であった。

三国惨敗して世界的に民族自決主義が台頭し、植民地は大国の支配を脱して自主独立の機運を昂揚して行った。ある宗教誌は解放独立のために弱者救済のために、日本は多大の犠牲を惜しまず戦ったのだと、正義聖戦を説いているが、その教者の手前味噌のこじつけ説では、進攻の起点から惨敗の閉幕までの戦争意義はわからない。

（風来子）

神のかなと湊

京へ　その一

(56)

楠　早鳥作
福田長庵画

目を覚ますと厳島の翠緑がしたたり落ちて水にとけこんだように海は青かった。昨日の払暁、三田尻の港を出て夕闇の迫る頃には、この島の泊に投錨し一夜を過した。

近年、大内の版図が拡大するにつれて、また京との往来が頻繁となるに従い、瀬戸内の中枢に位する因島に城を築き、多数の海賊衆を麾下にもつ村上義弘の動向が大きい問題となってきた。

明継は、この数年来、義弘と接触をもち続けてはいたが面識はなかった。彼は早くより宮方に組し大塔宮の令旨を賜り、また将軍宮の九州経略については格別の働きのあった人物である。

「とにかく彼奴を手なづけねば京への道は閉ざされたようなもの一つ将軍宮亡き後の状勢をとき、当家に都合よきよう計ってみてくれ」

と弘世から依頼をうけた、この事も上落において海路をとった大きい原因であった。事実、最近の大内船の度重なる瀬戸内の通航は、海賊将軍と自他共に認めている村上義弘をいたく刺戦していた。〈面倒なことを引受けたものだ〉うかぬ顔を朝の風にさらして、彼方に見える海中の大鳥居が目をその背后に移した明継の顔に変化がおきた白せきの短に紅がさし、みるみるそれが喜色に輝いた。〈ここに城を築き軍船を備えれば――たとえ造らなくとも、その気配を村上義弘に覚らせれば事情はすぐ分かって来よう〉後世、この現在国鉄連絡船発着所のすぐ裏に位する丘の重要性に気付いた武将が一人いた。その名を毛利元就と言う。彼は、広く海上を利用し、西は防長から九州に向い、南は伊予に対し、東は遥かに上方を窺うには、瀬戸内海上の最重要地点を厳島であると目して、広島湾の東西両岸の占領を計略しつつ南下しついに天文末年ここに城を築いた。これにより大内家の後継者となっていた陶晴賢は、元就の志、小なりと判断し大軍を厳島に投じこの城を包囲した。城の命旦夕に迫った弘治元年十月一日、対岸の廿日市桜尾城にあった元就は小勢ながら敵前上陸を敢行し、よく大軍を撃ち破り陶を亡くし、以后西国の覇者となる礎を築いた。

島に上った明継は、宗像、大内の両家から枉された幣帛の櫃につきそい、社人に願意を告げた。ほどなく祈祷が始まり、神前に額づくと、内から起るさゝも言われぬ感動に身が震え、思わずまぶたを閉じると、すぼるが日夜拝む「神ノ島」の姿が浮んだ。

後年、明継はふとこの時の感動を人に語り〈異国人である自分がこの時、始めて神をしったと言い往時をなつかしんだと伝えられている。

同家の繁栄を祈り、船頭等を先に船に帰し、先刻の小高い丘に登り地形を調べ思案にふけっていると、母子が一人駆け上ってきて

「面倒な事になりました。たった今、海賊衆が船に漕ぎつけました。大内の船とみかけるが難題をもちかけますので、船頭が兎に角、貴方様をお連れするようにとの言いつけで参りました」

顔を引きつらせて一気にしゃべり指さす彼方をみると、軽舟が五、六隻、船の周囲を漕ぎ廻っている。

「して、相手は何と言う名だ」

村上の手の者で重宗と名乗っていると母子は言った。

「小舟を用意しましたので、御参詣のお供をいたします」

船頭の案内で島に向うと大鳥居の彼方に朱塗の御殿が現れた。

宗像三女神を斎き祀るこの社は大神一の地に御出現し佐伯鞍職に宝殿廻廊を建立し厳島大明神を厚く崇敬せよとの御託宣が下り、よって推古天皇元年十一月十二日、宝殿をたて、神領を附し奉ったのがその起りで、延喜の制では神大社に列し、のち安芸国一の宮と称せられた。武家の世となり平清盛が当国の守護に任ぜられるや、一門の守護神と仰ぎ新に殿舎を造営し、百八間の廻廊を起し、鳥居を建てた。ために平氏の一門を始め公卿の参詣がすこぶる多く、承安四年には後白河法皇、建春門院と共に御幸になり、毎年二度の官幣を賜るべき命を承け、治承四年には高倉上皇の再度にわたる御幸があった。その后、文永年中、火災に罹り社壇ことごとく焼失したが幾許もなく造営せられ景観は旧に変らなかったと言われている。

島に上った明継は、宗像、大内の両家から枉された幣帛の櫃につきそい、社人に願意を告げた。ほどなく祈祷が始まり、神前に額づくと、内から起るさゝも言われぬ感動に身が震え、思わずまぶたを閉じると、すぼるが日夜拝む「神ノ島」の姿が浮んだ。

後年、明継はふとこの時の感動を人に語り〈異国人である自分がこの時、始めて神をしったと言い往時をなつかしんだと伝えられている。

同家の繁栄を祈り、船頭等を先に船に帰し、先刻の小高い丘に登り地形を調べ思案にふけっていると、母子が一人駆け上ってきて

「面倒な事になりました。たった今、海賊衆が船に漕ぎつけました。大内の船とみかけるが難題をもちかけますので、船頭が兎に角、貴方様をお連れするようにとの言いつけで参りました」

顔を引きつらせて一気にしゃべり指さす彼方をみると、軽舟が五、六隻、船の周囲を漕ぎ廻っている。

「して、相手は何と言う名だ」

村上の手の者で重宗と名乗っていると母子は言った。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

第24回福岡県郡市対抗 青年駅伝競走大会

宗像郡躍進賞に輝く

標記大会が去る二月八日（日）福岡県体育協会等の主催で、津屋崎町の福岡県立水産高校―鐘崎間の折返し、七区間三十二・二㎞のコースで二十二郡市の参加の中で実施されました。

この大会は冒頭にも記しているように今回で二十四回を数える県下でも有名な競技大会の一つであり、今回初めて本郡内で実施されたものです。

この大会は従来宗賀島周回コースで実施されていましたが、今回同地の道路事情で開催不能となり急遽本郡にコースの打診がありました。本郡としては、急な話ではあるが、これが本郡のスポーツの啓蒙、発展につながるので是非本郡で取組もう、という事になった訳です。

会場を引受けるからには、レースに支障が生じない様に、後援団体として最大限の努力をし作業を進めてまいりました。この中で郡内のあらゆる人々のご理解、ご協力が不可欠である事は言う間でもありませんが、幸いにも快よくご協力をいただき順調に作業を進める事ができました。

一方、宗像郡としての参加体制も例年になく熱が入り、選手の決定にもとまどう程の粒ぞろいとなり上位入賞を目指して取組みがなされました。

大会当日は、幸い、雨も午前中でやみ絶好の大会日和となり別紙成績表のとおりの結果で無事終了することができました。

この大会をふりかえってみますと、当初の目的は達成され、大きな成果を得たのではないかと考えております。

コースには各郡市の関係車輌が多数入りこみひどい交通渋滞が生じ関係者に非常にご迷惑をおかけしたにもかかわらず、気持よく待機していただきましたし、沿道には多くの人が選手を励ましていただきましたし、更には本郡も第五位という今までにない成績で躍進賞をも得る事ができました。

この事からも「普及、啓蒙」という目的は達成されたと思っております。

しかし、この成果は「本郡内のコース」という事だけによるものではないと思います。宗像マラソン大会はじめ種々の社会体育事業に宗像大社にひとかたならぬ尽力をいただいている事が培われてきた成果ではないかと思っております。

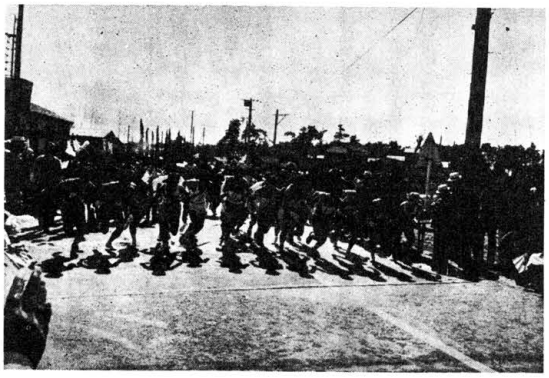
この大会も、今後本郡で何年か実施してゆきたいと思っておりますが、本郡のスポーツの発展のために、宗像大社はじめ各方面の方々のあたたかい理解、ご支援をお願いしたいと思います。

成績は次のとおりです。

(1) 北九州市　一・四三・〇八
(2) 久留米市　一・四三・五九
(3) 飯塚市　一・四五・三七
(4) 粕屋郡　一・四五・四〇
(5) 宗像郡　一・四六・二〇
(6) 遠賀郡　一・四六・三一

×　×　×

教育丘宗像出張所
中村記



話題の新車をみる (VII)

スバル・レックス SEECITの巻

富士重工は去る十二月一日からスバル・レックス（SEECIT）シリーズを全国一斉に発売した。

軽乗用車メーカーが排気ガス規制によって大きな岐路に立たされ・五g（四月実施）に漸定的に躊躇している現状にあって、軽では不可能と思われていた排気ガス規制を4サイクルエンジンであれ一挙に解決、五十一年規制適合車として発売した意義は極めて大きいといわねばなるまい。

現在、軽乗用車は2サイクルエンジンを搭載するメーカーが、いずれも五十年度の炭化水素（HC）排気基準達成を困難として去る十一月末、五十二年九月まで延長、当初のHC走行キロ米当たりの排出量〇・二五g以下を、四・五g（四月実施）に漸定的に緩和された時期にがである。

そもそも構造作動からして、2サイクルではNOx対策が極めてつらい。

逆に4サイクルではHC対策は比較的に容易だがNOx対策が困難。むづかしさの点では互格の壁ではあったが、スバルはこれを後処理装置なしの独自のシステムで克服。

レックスは、レオーネと基本的に同じコンセプト。つまり吸排気バルブ・オーバーラップを利用し排気自己還流を行ない、燃焼温度を下げてNOxを抑え、気化器をなる丈リーン側にセットすると共に排気の脈動効果による2次空気導入装置ASVを備えて排気ポートやマニホールドで残余のHC・COを酸化反応させて浄化するもの。

排気量三五八CCの4サイクルエンジンは、六六×五三・四ミリのオーバースクエア版、ボアストローク比が一、二六。直列2気筒単OHC。圧縮比九、〇。最高出力二八PS／七五〇〇rpm。最大トルク二、九Kg m／六〇〇〇rpm。

ミッションのギヤ比は①四、九五七、五②四、五九②二、三六七③一、九五〇④一、三六〇と五、三一二の減速比をもち、五、二〇―一〇のタイヤ寸法まで含めて従来と変更なし。

サスペンションは前後ともセミトレーリングアームで全輪独立懸架方式でスバル独得の機構を踏襲している。

全長二九九五、全幅一二九五、全高一三〇〇ミリ、車両重量五六五Kgのミニカーで、最小回転半径が四、一米ゆえ、都市内や田舎では運転しやすい。

価格は2ドア・セダン（STD級で四八、三）A1（DX級で五三、五）A1G（スーパーDX級で五五、五）AII（カスタム級で五六、五）4ドアセダン・A1G（スーパーカスタム級で六一、一万円）

ご苦労さまでした。さようなら東郷橋

宗像郡宗像町東郷の釣川にかかる旧国道三号線の"東郷橋"が新橋建設のため取りこわされた。

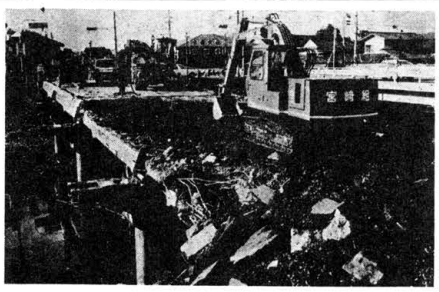
東郷橋は、大正十二年七月に鉄筋コンクリート橋にかけかえられ、最大重量二十トンまで耐えられるように設計されていたが、昨今の交通量増大と車輌の大型化により、橋脚部分が沈下、中心部で七十センチ以上も下がり、脚部に数ケ所のキ裂を生じるなど危険度が高まっていた。

このため昨年よりすぐそばに仮橋を架け、通行止めの措置をとっていた。このほど新橋建設とともない取りこわしを行なったものである。

計画では、五十一年度中に橋脚部をつくり、完成は五十三年度になる見通しである。

旧三号線に架かる東郷橋は長い間九州の主要幹線道路の一翼をにない、往きかう人々になれ親しまれてきたが大役をはたし、引退することになった。

長い間ご苦労様でした。



社務日誌

二月一日　月次祭
二月二日　大漁祈願祭、午前十一時斎行、郡内六浦漁協関係者十数名参列、祭典終了後斎館にて会議
二月四日　節分祭年前十時斎行、於祈願殿、高橋玄海町々長、玄海幼稚園々児、東海大付属幼稚園々児等三百名参拝祭典後、県警指導員により幼稚園児の交通指導
二月五日　出光興産店主、同北川氏祈願、福岡支店内田次長代参葦津宮司、本多権祢宮、古文書寄贈御礼の件にて東京出光本社へ
赤間駅安全祈願
日之出興産㈱　堀尾社長外参拝、
名古屋、三祐コンサルタント㈱　会長久野庄太郎氏外一名参拝
二月八日　第24回福岡県郡市対抗青年駅伝競走大会
二月十日　水産庁福岡出張所久長外三名参拝
玄海町成人学級、於斎館
二月十一日　建国祭、午前十一時斎行、地元総代並寿会田中丸氏参列
八幡宗像会総会、葦津宮司、外一名出席、於八幡新月会館
二月十二日　神湊稲荷祭
玄海町成人学級、於斎館
二月十三日　宗像大社奨学生選定会議、於斎館
二月十五日　月次祭
定例職員会議、午後三時半、於会議室
二月十六日　出光美術館松見氏来社（宝物館建設の件にて）
二月十七日　葦津宮司、養父祢宜、昭和造営誌献上の為、宮内庁及び東京出光本社へ
二月十八日　春日神社（東京都）大野宮司外二十名参拝
二月十九日　雲仙神社氏子会二十名参拝
大谷山樹木伐採、地元総代九名奉仕
二月二十三日　宇部市琴崎八幡宮宮司白石正氏外四名参拝
出光興産福岡支店内田次長来社、
東郷駅駅長、鈴山忠氏、福間駅駅長、永島友雄氏慰任挨拶のため来社、
郡内責任役員旅行、（別府方面へ二十五日まで）
二月二十四日　葦津宮司欧州宗教事情視察のため渡欧
二月二十五日　出光興産㈱　大宮支店古田氏参拝
和光神役㈱原田氏参拝、
広島県青年神職会十五名参拝
二月二十七日　宇都宮祢宜、神島権祢宜、大島、神湊漁業組合長若布献上の為、上京（二十九日帰社）

瀛津嶋防人日記

それではこれから彼の短歌五二首の一首一首についてお話ししよう。

(1)沖津浪千重に立ともぬきまうり君し祈らば豈さはらめや

沖の波が限りなく重なりあって立とうとも、君さえ祈ってくれたならば、どうしてじゃますることがあろうか、ありはしない。

「ぬさ」は神に祈るために捧げる物で、麻・木綿（ゆう）・帛（きぬ）・紙などが用いられたが、種信のころは紙をまかくざんで袋に入れたものであったかもしれない。

(2)わたの原しまのさき〳〵霧たゝはむ

海原の島のゆくてに霧がたったならば、君たちのためいきだと思おう。

「をきそ」は、ためいき。嘆息。「もはむ」は「思はむ」の略音。

右の二首は見送りの人々に対して船に乗る前に作った即詠の歌であるが、一首目の上の句は万葉集に類句があるし、二首目も新羅につかわされた一行の歌に「君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ」（巻十五・三五八〇）や、山上憶良の「大野に霧立ち渡る」（巻五・七九九）という歌などがあるから、種信もそれらを意識してこの歌をよんだのであろう。しかもそれでいて二首とも写実的・具象的で実感のこもった作となり得ているのは作者の手がゝであろう。

(3)足姫（たらしひめ）神のみこと

とのいてましの御船はてけん浦ちかつきぬ

神功皇后が三韓の征途にお出かけになった時のお船が泊ったであろう入江が近ずいた。

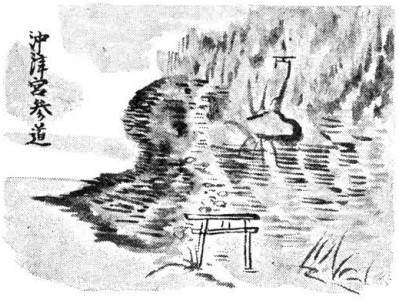
「足姫」は神功皇后。「神のみこと」は神に敬ってみことといったのである。「浦」は志賀の島の今のはとばあたりをさしたものであろう。彼は一行とともにここに一泊したのであった。この歌などは万葉調の本格的な行き方の一つといえようか。

(4)志賀のあまの小船つらなのはなりそのありその上に藻かる見ゆ

志賀の島の漁師が小さな船をつらねならべて離れた磯であり、荒磯でもあるところで、海藻を刈っているのが見える。

この歌も万葉の「我が背子を我（あ）が松原と見渡せば海人をとめども玉藻刈る見ゆ」（巻十七・三八九〇）などを参考にしたのではないかと思われるが、単なる模倣でなく、自分の歌によ消化させているし、「はなりそのありそのし」と重ねたところなどは作者の力量といえようか。

(5)春霞立かくしたりから沼残のうら浪見てましものを



春霞が立ってかくしている。から沼に寄せる残島（のこのしま）の浦の波を見たいと思うのにまあ。

「から沼」は万葉の韓泊で今の糸島半島の博多湾側にある唐泊である。「残のうら浪」は今の能古の島と半島との間に立つ波をさしたものであろう。二ケ所とも万葉の歌があるので作者にはともになつかしかったのであろう。万葉の「唐泊能古の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（巻十五・三六七〇）の歌をふまえての作である。

(6)神さぶるいそらか崎による貝をひろひてゆかむ神はぬるとも

古めかしくおいそかである磯長が崎に寄る貝をひろって行こう。神はぬるとも。

「いそらが崎」は磯長が崎で、志賀の島の南の金印出土地や今の金印公園の下あたりの岩礁をいったものであろうという。また勝馬明神のうしろの伶に御藤本という所という説もある。「神はぬるとも」は新古今調といえようか。万葉には「我が背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋忘れ貝」（巻六・九六四）「暇あらば拾ひて行かむ住吉の岸に寄りをる小忘貝」（巻七・一一四七）などがある。

(7)わたつみも心あらなん日限の立さふへしや吾家のあたり

海の神さまも思いやりの心があってほしいものである。白浜が立ちかゝってよいものであろうか。よくない。わが家のあたりに。

「わたつみ」の「わた」は海、「つ」は「の」に同じで、「み」は神であるから、海の神のことである。博多の方の自分の家が立つ白浜にさえぎられて見えないのを嘆いた歌である。万葉の「三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなむ隠さふべしや」（巻一・一八）の歌が作用していると見てもよかろう。万葉の防人の歌自首あまりのほとんどが、妻子中心の望郷哀愁の歌であるのに対して、日記の歌はそれが二首あまりしかない上に大半は敬神歓喜の歌である。それは一番といっても故郷に近い島で、期日も短いためであり、種信が神道学者であったことなどによるものであろう。

九州大谷短期大学教授
中村行利

宗像大社歌会
俳句作品集（一五八）

朝日射し孫の産毛梅かおる　東郷　有吉　春子

餅つき機械と成りて音もなし　土穴　八尋　恒夫

春来たと語りたげなる陽さしかな　藤沢　玄洋子

辺津宮に初東雲を祥しけり　吉留　伊豆　英子

地の底に在るもろ〳〵や春を待つ　福岡　力丸ゆづる

男児得てはほっらしく実南天　田熊　安部　ゆき

枯る中咲くや水仙花一輪　田島　有吉　唐水

霜日一駅舎に急ぐ朝かな　福岡　入江　桝江

冬の宿無口同志の二人きり　田熊　力丸　一郎

家族づれ人試祈願や梅の宮　宗像　岡田　無名

航く船の水尾くっきりと二月晴れ　大井　吉田ますみ

田鶴遊ぶ刈田の水の光りけり　大井　吉田　和子

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦
―出光佐三の事業理念―

第六章　廃虚の中から
タンク底にもぐる

二十二年から二十三年にかけての公職追放では、経済界だけで二千二百人が追放された。佐三も二十二年二月に追放が決定、二十六年の講和条約締結まで解除されなかった。

占領下の石油政策は、総司令部（GHQ）のG4（参謀本部兵站部燃料補給班）と経済科学局（ESS）が担当した。輸入、配給など政策の立案、管理の主体はG4であり、経済学者は日本経済の再編成という側面から関与していた。

ただし、G4は石油にたいする専門的知識がない。そこで、スタンダード、シェル、ユニオン、タイドウォーター、カルテックスの米、英系五社から派遣された専門家たちでPAG（石油顧問団）を設けた。実務は、このPAGが切り回したのである。

戦争中、わが国の製油設備の五八パーセントが破壊された。大部分が太平洋岸である。

終戦直前の貯油は、四十五万キロリットルにすぎなかった。太平洋戦争開始時のわずか七パーセントである。占領軍が進駐した時点では、これがさらに減っていた。

民生の安定、産業の再編のために必要な石油は、当初は米軍の軍需品として、のちにはガリオア（占領地救済基金）輸入物資として放出された。

配給に当たったのは、戦時中の石油配給統制会社を引き継いだ石油配給会社だったが、総司令部はこれを解散、二十二年六月には全額政府出資による『石油配給公団』を発足させた。十月には新石油販売業者が指定された。

出光興産はこのとき指定業者に入り、初めて石油業界に復帰している。

この間、二十一年九月にはPAG五社によってJOSCO（ジョスコー、日本石油保管会社）が設立されている。当時の日本石油横浜製油所の一部などを借りあげて、貯油所に使った。

先のPAGとともに、戦後の国際石油資本の進出の前段階として注目されるできごとであった。

さて、総司令部は石油の配給業務は最終的には完全に民営でやらせる方針であった。二十三年九月には、政府にたいし主要輸入基地の民営移管と公団方式による配給統制の早期廃止を勧告した。これに伴って、二十四年二月には石油製品配給規則が改正され、配給公団も解散された。

石油共販会社の設立ラッシュ、約十年間続いた石油の配給統制は、ここで完全に終止符を打った。

同時に政府は『輸入基地を運営し、かつ配給能力を有するもの』としてつぎの『元売り業者』を指定した。国内資本七社、外国資本三社である。

日本石油、三菱石油、昭和石油、日本鉱業、出光興産、ゼネラル物産、日本漁網船具、シェル石油（日本）スタンダード・ヴァキューム、カルテックス（日本）

これで、創業いらい続いた出光と日本石油との関係は、完全に切れることになった。

元売り業者には八月となって丸善石油、興亜石油は販売業務をやめ十二社となった。

一方、石油業界の最大の関心事は賠償の取り立て問題となった。わずかに戦火をまぬかれた精製設備などを、賠償物件として持ち去られたのでは、業界の再建はおぼつかない。

二十一年十一月の『ポーレー報告』は、日産四万バーレルの精製設備、一千万バーレルの貯油施設を残し、あとは全部撤去するというきびしいものだった。

ところが『ストライク報告』『ジョンストン報告』『ドレーパー報告』と経過するうちに、米国の対日政策も変化した。二十四年五月には、極東委員会で賠償施設の撤去中止を声明している。

さらに、二十四年三月に提出された『ノーエル報告』は『日本の石油需要をまかなうためには、既存の製油設備を復旧し、石油輸入を最善の方策である』と勧告した。

最初の『ストライク報告』からみると、百八十度の転換である。

これを受けて総司令部は、二十四年七月『太平洋岸製油所の操業および原油輸入に関する覚書』を発表している。これで、二十五年一月から八月までの間に日本石油、東亜燃料工業など七社、九製油所が操業を再開した。

いわゆる『消費地精製主義』の確立であり、製品の輸入は重油と特殊潤滑油以外は認められないことになった。

話題を終戦直後にもどそう。

敗戦によって出光は海外事業のいっさいを失ったが、戦時中の石油業者としての活躍はめざましかった。それに、配給統制会社に吸収された内地の旧地盤がある。佐三は当然、戦後の石油業界に復帰できるものと考えていた。

ところが、これは大きな誤算だった。

業界にとって、出光の復帰などはとんでもない話だったのである。すでに述べたように出光は、大陸で石油聯合や国策業者と徹底的に戦っている。業界は出光のためどれだけ苦杯をなめさせられたかわからない。ハラの底から『コンチクショウ』と憎んでいるのだから、復帰を受け入れるわけがない。

佐三、配給統制会社に日参した。『石油の配給をやらせてくれ』と頼み込んだ。しかし、返事はどうにもえきらない。

しびれを切らした佐三は、十月になって配給会社の堀江平重郎社長にかけ合った。最後の談判だったが、堀江社長はどうしても首をタテに振らない。

佐三は怒った。さすがに『バカ』とまでは言わなかったが、けんかを吹っかけるタンカを切った。

『もう頼まん。これ以上は、けっしてあんたに頼まん。ただし、実力でとってみせるから、そう思っときなさい』

タンカは切ったものの、佐三は困った。

従業員はぞろぞろと海外から帰ってくる。ほとんどの会社が、このとき大幅な人員整理を行なった。しかし、出光にはそれはできない。従業員は出光大家族の一員であり、その首を切ることは出光の理念の崩壊であり、自殺である。

従業員とその家族を養うためには、みんなで知恵をしぼり、新規事業を開拓する以外にはない。耐乏生活を続けながら、石油業界復帰の機会をうかがうのだ。

九月、鳥取県の大山山麓に百町歩の土地を求めて農場を始めた。茨城県石岡に簡易工場を作り、しょう油、食酢の製造に乗り出した。定置網漁業にも着手した。三重県の有井漁業会から権利を譲り受けたのである。

しかし、こんなことでは企業員の生活は保証できない。なれない事業だから、成績もなかなかあがらない。八方ふさがりである。

佐三は十一月の『詔書奉読式』で訓示している。

『仕事を見つけることに努力せねばならぬ。出光人としては、石油の配給を簡易化することが国家のためであるとの信念のもとに、石油配給統制会社に援助を頼んだが、同情がない。復員者は待機の姿勢を続けるほかはない。人間しばらく眠るもよいと思う。ただし、活眼を開いて眠っていよ』

悲痛である。どん底の苦しみがにじみ出ているが『活眼を開いて眠っていよ』というところに、佐三の面目躍如たるものがある。胸中深く期するものがなければ、活眼は開けない。ぐっすり眠り込んでしまうだろう。

こんなとき、政府から『戦災にかかったラヂオの修理復旧事業をやったらどうか』と仕事の話を持ち込んできた。

総司令部は、占領目的を達成するために宣伝活動を強化したい。ラジオはその有力な手段だが、なにしろ焼けてしまって使えるものが少い。そこで政府に、放送施設の普及と罹災ラジオの修理を指示したのである。

出光はこれを受けた。全国の主要都市百カ所に支店、営業所を設け、ラジオ、無線の送受信機と電気器具の修理販売を行なう計画を立てた。

資金は、当時東海銀行の東京駐在常務になっていた久保寺良吉氏に頼み、三百万円を融資してもらった。

出光興産電気部は、二十一年一月に発足した。最盛時には、全国に五十の営業所、約二百七十人（うち、旧陸軍の技術者二百人）の従業員を配置した。

結局、千八百万円の赤字を出し二十四年三月に閉鎖したが、まず注目されるのはその店舗の配置の仕方である。

計画した全国の百カ所の支店、営業所は、ほとんど臨海地帯に予定した。実際に設置したのは主分の約五十カ所にとどまったが、明らかに将来の石油配給をねらった拠点づくりを兼ねている。

事実、二十二年十月に出光が公団の販売業者に指定業者に指定されたとき、このうちの二十九店が販売店となった。

もうひとつ。

電気部が巨額の赤字を出して閉鎖に追い込まれたとき、全員に『運営型ではダメだ。経営型で自らを鋳直せ』と猛省を求めている。

『運営型』とは統制と組織、機構の中での、親方日の丸、事なかれ主義のやり方を指す。これにたいし『経営型』とは独立自治、人が資金を作り人が利潤を生む、出光式の事業形態である。

国による統制機構、あるいは業界団体による安易な協調体制、さらには個々の企業でも一定の水準、規模まで事業が拡大すると、従業員ひとりひとりの個性が殺され、自由な発想より妥協、もたれ合いが尊ばれるようになる。発展のエネルギーが減殺され、競争力は弱くなる。人間としても堕落である。

佐三は、それを恐れた。『十八百万円の赤字は出光にとって痛手だが、全出光人を経営型に鋳直す授業料と思えば安い。失敗を繰り返さないよう、自らを考え湯の中にたたき込んで再出発せよ』というのである。

このあと、二十一年三月には東京の品川、三田に印刷工場を設け、平版、活版印刷にも手をつけた。

これらの事業は、石油業界に復帰したのちの二十五、六年までには、すべて閉鎖している。

石油業界に復帰するまでの『どん底〝時代の事業の中で、もっとも成果をあげ、総司令部や政府、経済界に出光の名を認識させたのは、二十一年四月から翌年七月までで行なった、全国八カ所の旧海軍燃料タンク底の残油集積作業だった。

総司令部は二十年十月の『石油製品に関する覚書』で、タンク底残油を日本に引き渡し、有効処理して配給するよう指示している。商工省は収集作業を出光に、再生処理を全国の精製、廃油業者に、また配給を石油配給統制会社に行なわせることにした。

八カ所とは、北の方から厚岸（北海道）大湊、横浜、四日市、舞鶴、呉、徳山、佐世保である。

出光は引き揚げ従業員約二百人を配置、作業に当ったが、なにしろ日海軍でさえ手をつけられなかった作業である。機械は使えない。おまけに爆発、窒息の危険さえある。一般労務者を使うわけにはいかない。社員が自らタンク底に入り、調査から汲みとりまでやった。

宿舎といっても、実態は飯場である。社員たちはムシロやセンベイぶとんにザコ寝、うすい雑炊やイモ、カボチャ、スイトンをすすりながら、フンドシ一貫でがんばった。

身体にロープを巻きつけて底に降りる。汲んだ油をポンプやウインチで引き揚げる。油まみれだから皮膚病にかかる。まっ黒い顔の男たちが、おたがいに励まし合って働いた。

佐世保での話である。

益休みに妻帯者を帰宅させた。その中のひとりが、しょんぼり戻ってきた。

『どうした』と聞くと『家内に叱られて、もうひとりぼっちにされました』という。『なぜ叱られたんだ』と問いただすと、下半身を指して『ここがだだれてしまって…』と泣きそうな顔だ。

十日ぐらい医者に通わせ、全快したところで手紙をもたせてもう一度、帰宅させた。

手紙にはこう書いた。

『これは浮気をしたのではなく、一生懸命働いた証拠です。きれいにして奥さんにお返しします』

翌年七月までに、八カ所合計で約二万キロリットルの廃油を集め、精製、廃油業者に引き渡した。出光もこのうち三千六百キロリットルの再製を割り当てられた。

インフレの進行で出費がかさみ、事業収支は、五百七十万円の赤字だった。出光はこの作業で何ものにもかえがたい収穫を得ることができた。

その第一は、従業員に不屈の精神が植えつけられ、会社協力一致の体制が固まったことである。電気、印刷などでもそうだった。みんなが不平ひとつ言わず、朝早くから夜おそくまで、助け合って働いた。みんなが、みんなのために働いたのである。

創業当初、ほんの数人、あるいは二、三十人の従業員が佐三を中心に作りあげた独特の店風が、敗戦の試練と風雪に耐えて、ふたたびみずみずしい芽を吹き始めたのである。

出光ではいまでも、困難に直面するたびに『タンク底にもぐりゃいいんだ』という言葉が出る。『タンク底時代の心構えに戻れば、どんな難関だって突破できる、不可能ということはない』という意味である。

第二は、出光にたいする認識が改まったことである。

総司令部の出光をみる目が違ってきた。敗戦によって腰が抜けたかにみえる日本人の中で、本当の日本人の姿を出光に発見したのであろう。

また、横浜正金銀行（東京銀行の前身）の門司支店長が、タンク底作業をみて驚いた。『こんな商社も日本にあるのか』というのである。これがのちに、同行が出光に融資するひとつのきっかけとなった。

児童の遊戯・玩具

本月も引続き、二・三の遊戯を紹介致します。

凧（ねずみ）ごっこ

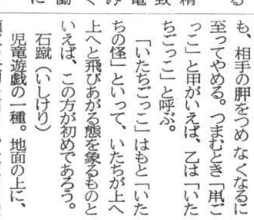
凧が物をくわえていくのになぞらえた遊戯。甲の手の胛（こう）をつかめると、その乙の胛の上を甲がつめる。さらに乙がつめる、甲がつめるというふうに、下から手をはずして、幾度でも繰り返すうちに、だんだん脊のびしても、相手の胛をつめなくなるに至ってやめる。つまむとき「凧ごっこ」と甲がいえば、乙は「いたちごっこ」と呼ぶ。

「いたちごっこ」はもと「いたちの怪」といって、いたちが上へ上へと飛びあがる態を象るものといえば、この方が初めであろう。

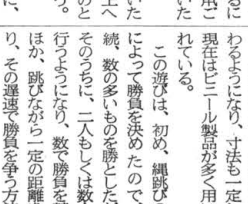
石蹴（いしけり）

児童遊戯の一種。地面の上に、適宜の仕切を画いて、数区画を設け、なるべく平らな石（後には石蹴メンコ・石蹴ガラスが用いられた）を、定めの一区画内に投げ入れ、それから、片足飛びで跳ねながら、目的の線外へ小石を蹴って入れ、順次、全区画を終る、早く上ったものを勝ちとする遊戯で、明治の初めころ西洋から移入した。鍊成的な性能を有する遊戯として流行し、X線のあるものは、両足を地につけて、それから次の場に蹴り入れた。

一八八〇年ころ移入の石蹴図面

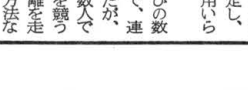


石蹴の石を投げ込む場



児童の投げ込む位置

一九〇〇年ころ流行の石蹴図面



一九五〇年ころ流行の石蹴図面の一、かたつむり形

縄跳び（なわとび）

縄の両端を両手に握って身体の上下にまわし、縄の下にきたとき、両脚を揃えて、縄を跳び越す遊戯。藁縄が作られだしたころに始められたと思われる古い遊びで、縄の才法も、これを使用する人びとの身長に応じて自由に作られ、縄を、前方から後方へ、或は後方から前方へとまわす遊びかたも定まらなかったが、次第に、縄が、藁製品から、麻製品にうつり、縄跳び縄としての商品が出まわるようになり、寸法も一定し、現在はビニール製品が多く用いられている。

この遊びは、初め、縄跳びの数によって勝負を決めたので、連続、数の多いものを勝ちとしたが、そのうちに、二人もしくは数人で行うようになり、数で勝負を競うほか、跳びながら一定の距離を走り、その遂速で勝負を争う方法などが行われた。また、勝負に重きをおかず、實語遊戯の一種として、跳ぶものと、唱うものとに別れて行う方法なども始められ、遊びの方法が複雑になってきている。

陣取（じんとり）

団体的競争遊戯の一種。明治時代欧米体操移入の時代、種々の形式で行われたが、古くは江戸時代に戦術修練の法として行われ、明治時代においては徴兵令施行後軍隊の操練に行われた。

小中学校の体操時間にもっぱら行うようになったのは明治二十七年（一八九四）ころからで、これには定められた遊戯規則があり、明治三十年ころ隆盛期に入った。大正十年（一九二一）ころの施行は、主として小学五年以上に行い、心理上の共同心、責任感修練、機敏性の養成を目的とし、運動場や野外広場で行った。方法は、全児童（生徒）を紅白二組に分け、各々その組の標識たらしめるため、紅白帽・紅白襷を用いさせた。これら二組は、共同の列円陣を作り、五人を除くほか、皆足の周囲に直径一尺五寸くらいの円を明瞭に描かせ、後、二列縦隊とし、突然「陣取れ」の合図をすれば、児童は合図と同時に、両円陣を自分けて走り込む。円数は五人だけ少いゆえ、紅白いずれか五人の児童は陣に入ることができない。陣に入ることのできない児童の多い組を敗けとした。